

## 「ハツ場ダム建設事業の検証に係る検討報告書（素案）」に対する関係住民の意見聴取

平成 23 年 11 月 6 日（日）10:00~12:00

さいたま新都心合同庁舎検査棟

発言者：意見発表者 3

ただいま紹介を頂きました、私旧大利根町の●●と申します。実は、今ここへ来てビックリしたのは、皆様お偉い方の素晴らしいご意見をお聞きして、とても自分では家に帰りたくなっちゃいますので。でも「●●さん行ってこいよ、行ってこいよ。」とみんなに勧められてまいりましたので、私の話は絶対今まで皆さんがお話したような、そういう難しい話はございません。私がこの肌で感じたカスリーン台風の時の非常に困ったこと、それから、非常に悲しかったこと、そういうことを実際にお話ししますから、とても良い言葉でとか、良いデータとかはありませんけれども、そこに大急ぎでお配りしたようなことは自分で調べたものを持って参りましたので、それはお家に帰ってからご覧下さい。

それでは本題に入らせて頂きます。今から 15 分喋らせて頂きます。私は昭和 19 年に結婚しました。戦争の真っ最中でございます。昭和 20 年に長女が生まれました。そして、その時は皆さんご存知の終戦で、ここにいる方はお若い方ですから一人もそれを知らないと思うのですが、大変でございました。今まで天皇陛下のお言葉なんて国民が聞くことはありませんでしたが、昭和 20 年の 8 月 15 日に終戦を迎えて天皇陛下のお言葉を、その当時は玉音といったのです。そういう言葉を聞いて「ああ、いよいよ負けたんだ、負けたんだ」と言って、それからは上を下への大騒ぎでございました。そして、昭和 21 年、いや昭和 20 年に私長女を生みました。それから 21 年になってマッカーサーが日本へ乗り込んできて、全てのは改革されました。一番私が悲しいと思ったのは、地主が持っている農地を全部開放するよということでした。私の家も空っぽになったような感じになって、22 年から米作りを私が学校の勤めをやめてやらされました。そしたら、その 22 年の 9 月 16 日は大水の出た日でございます、その日はちょうど 9 月 1 日から 15 日まで雨が毎日シトシト、シトシト降ってました。私は天を眺めて「何で、こんなに天には水があるんだろう」と思いました。15 日だけは、いまあちこちで豪雨があつて大水が出て大騒ぎをしておりますが、その 15 日の日が雨がザッザッ、ザッザッと音を立てて降りました。それからですね、その日にちょうど私の家から水が決壊したところ、土手ですね、利根川の土手まで約一里ちょっと離れているんですが、その近くに親戚がありまして、そこからお祭りだからというので赤飯が届きました。その人に聞いたんです。「今、利根川はどうでしょう。」って聞きましたら、「今、土手の上から手が洗えるほど水が来ている。」って、「へえー、それじゃ大変ですね。」って、「今私がここへ来るまでに近所の農家の人たちが牛や馬を家に置けないので、しのやまに繋ぎに行きました。私も大急ぎで帰ってそこまで牛を連れて行かなければなりません。」と言って帰りました。それから、今度は家に居て、一里ちょっとも離れている利根川の水の音がゴォーゴォー、ゴォーゴォーすごい音を立てて聞こえてくるんです。一里ちょっとも離れているのに何でそういう音がするんだろうと思いました。母が言うのには、「牛や鶏小屋やワラ屋根の家が上から流れてきて、栗橋の鉄橋がありましたのでその鉄橋へぶつかって音がするんだよ。」「多分新川の●●さんの後ろ辺りは土手が緩いんじゃないかなあ。」って言ってました。「おばあちゃん、どうしてそんなに分かるんですか。」って聞いたら、「新川っていう名前のおと、そこはまだ 2~3 年前に利根川の水を横に流して新川通を作ったから、多分新川の●●さんの家の辺りは土手が低いかも知れないし、柔らかいんだよ。」と言いました。「でもね、こっちへ水が切れることは無いんだよ。」って、「へえーどうしてですか。」って聞いたら、「こっち側は江戸に近い

から天皇陛下などがおいでになるからこっちへは切れないで向かい側へ切れるんだよ。」「あれま、そうだったんですか。」って聞いて私もビックリしました。それから母が「どうも今度はこっちへ切れるらしいよ。あの音がするんだから。しょうがないなあ。大変だなあ。」って、「●●●、ご飯を一升五合炊きなさい。」と、そして私はそれから、なんでそんなに炊くんだろって思いました。「炊いたご飯を反対に開けたら梅干しをいくつも入れておけ。」と、それから「ありとあらゆる器へ井戸の水をみんな汲んで廊下へ上げておくように。」それからまた「明かりは全部集めて一つのところに置くように。」「畳はみんな上げておくように。」と、畳は全部座敷の真ん中に積みました。そういう母の言うことを聞いて、要するにそれは「水前」と言いまして水が入るまでの対策といたしますか、水が決壊して流れてくるまでの用意でございます。それだけの思いをしておけば、何とか幾日か持つからというんだからと思いました。それで、後で聞いたことですが、みんなその新川というところの土手がいくらか低くて新しい土手だったので、そこから水が漏れてそこから決壊したんだと思いました。340m 土手が崩れたんですよ、皆さん。340m 崩れたら、ありとあらゆる家が水に流されると、そのころは農家がたくさんワラ屋根の家がありましたと、ほとんどが流れました。私の資料の中に書いてありますので、後でお読み下さい。そして、その時、母が「ご飯を炊け」「明かりを用意しろ」「水を用意しろ」と言ったことが良く判りました。今も大水が出る時は「ああ、どこそこの地方で豪雨があってどこの町もどこの町もみな水浸しになった。」ということが新聞・テレビで出てきました。しかし、やっぱり避難するように町あるいは市、県で、国で皆さんに命令してみんなが集まるわけですが、それでも災難に流れてしまう人もいるし、いろいろあると思いますが、私は国から貰う水だのご飯だの当てにしないで、ある程度はおにぎりでも何でも作ってそういう豪雨があるような時には用意すべきが国民として私たちの努めではないかと今痛切に感じております。それから、母が言ったとおりでしたけれども、うちの母はどうしてそういうふうになんか色々なことを知っているのかと思いましたが、昔のことですけど、「明治43年の大水の時は利根川が決壊しなかったんだよ」というので、利根川堤（とねがわづつみ）の近くの方は多分安心していると思うのです。ですから、老人の言うことが必ずしも当たってはいないということを感じました。それと母が、どうしてそんなに知っているのかと思いましたが、母は生まれた家が利根川の土手つぺりの佐波という所の隅っこの人で、年中年中水の用意をさせられたようでございます。それを私に教えた訳でございます。そうして、ゴォーゴォーという音が皆さん一里以上も離れている利根川の音が私の家にまで響いてきたんですよ。私は、とってもそれがおっかなかったです。そうしていよいよ主人が消防団長をしておりましたのでお昼前に加須の警察署から呼び出しがありました。役場の小使いが「団長さん、早く役場へ詰めかけて団員を集めて待機するように。」と言われて主人が出かけようとなりました。母が「●●●、水は逆らうんじゃない。」と「水はすごいんだから逆らうんじゃないよ。気をつけて行けよ。」と言って出ていきました。主人の命令で、町、その時は大利根村でしたが、村中の団員が一軒一軒回りました。そうして水の用意を私の家でしたようにするようにしました。穀物は絶対に流さないように、2階のある家は穀物を全部2階へ上げること、それから、2階の無い家は近所へ預けたり、あるいは畳を全部上げた上へ穀類を載せるようにと命令がきたと、伝令がきたんです。私の父と、年取った父と二人で一生懸命長屋の蔵からその母が米俵や麦俵あるいは豆などそういうものを全部持ってきて二階へやっこやっここの体で押し上げました。よくぞこの力が出たと思って自分でも感心しました。そのうち主人が帰ってきまして、「加須から応援の消防団が来たんだけど、ひのや橋まで来たけれども葛西用水が氾濫しているんで、とてもそちらへ来らんなくて引き返したよ。」という話でした。それからまだゴォーゴォーという音は聞こえてきました。夜の12時になりました。時計が止まりました。と、同時に電灯が全部消えちゃったんです。ああ、お母さんの言ったとおりのあらゆる用意をして良かったな

あと思いました。そして、「お母さん、今夜当たりお産の迎えが来ますか？」と心配で聞きました。母は助産婦でございました。「くるんだよ。予定の人はいるから。」と言ったので、ああ、大変だなあと思いましたら、その時間に街道門辺りに明かりが見えました。「あっ、これは迎えですね」って言ったら「こんばんは、迎えです」と聞いて、母はとつと、とつと用意をして何分も掛からずにその使いの人にお産の道具を持たせて街道を出ていきました。私は母の後ろ姿を見て、どうか無事でお産を済ませて帰ってきてくれますようにと神様に祈りました。そして母は出かける時に「●●、どうせ今夜は帰って来らんないよ。明日昼間になるかもしれないよ。お産の産婦人と子供と家族の者を連れてくるから用意をしておくように。」と言って出ていきました。本当に、皆さん、そのとき、その晩、私も、その音も止まって、電気が消えた途端に今度は、また利根川の方から「切れたぞー、切れたぞー。」と言う声の家まで響いてきました。ああ、これは本当に切れたのだと思いました。胸がドキドキするような、とつても何とも言えない気持ちになりました。本当に今あちこちで、豪雨で水があふれるとか何とかっていう、いろいろな避難の命令が出ますが、私は主人に「良いねえ、みんなで一緒に避難出来て。」言ったら「馬鹿なことを言うんじゃない。避難する人には容易じゃないんだぞ。」と言われて、そうかなあと思いました。やっぱり、お水とか食べ物とか雨がたくさん降ってたら、自分たちである用意はしなければならぬと思います。それと同時にその時は昔のことですから、国や県や町から食料がなかなか届きません。それで届いた時にはコッペパンがもうベチョベチョ。だんだん悪くなっていたそうです。それでもみんなは、腹がへるからそれを食べちゃったそうです。それから、ご近所の人が大事にして、今はあげなきゃいけないのですが、そういう家の長屋の2階にみんな集まって避難しました。その時にはその場所にあるその家にあるジャガイモなどを、みんなが一週間も食べてみんな煮て食べたそうです。その家では、今でもジャガイモを煮て16日の治水の日にはそれを食べて、その大水の時の話を家族にするという、とても感心なお宅も今ではあります。その時、牛や馬を家へ、赤飯を届けた十軒のお父さんがそれから帰って、家はスナヤガイスナグモだと言ったのを聞いて、そのゴォーン、ゴォーンという音は、牛が流れたり馬が流れたり馬小屋が流れたりしてきたんだそうですから、本当にその当時の大水というのは大変です。今では国の命令だと思いますが、スーパー堤防というのが出来ておりますが、そのスーパー堤防のおかげでと言っちゃ怒られますが、水と緑の美しい町は、だんだん消えていくと思います。以上でございます。

以 上